

離れ離れの本たちをつなぐ

中野 敏男

本屋とか図書館は、もちろん他人様の本を探しに行く所だけれど、自分が書いた本についてもその所在は気になるものだ。今は画面に本の在り処を表示する検索設備も本屋にはあるから、私の本をついでに探すと、あっちとかこっちとか。離れ離れにあって、存在感が何となく希薄で切ない。やっぱりそうだよな。扱われているのはヴェーバー、ハーバーマス、ルーマン、大塚久雄、丸山眞男、そして北原白秋まで。内容を見ても、学問方法論があったり、法システム論があったり、思想史があったり、戦後日本が出てきたり、植民地主義が出てきたり、詩歌まである。そんなバラバラに見える本たちを一緒に書棚には置けないのだ。

それにしても、迂遠な道を歩いてきたのだと思う。何か一つの学問分野にしっかり自己限定しておけば、著書たちも並んで置かれていただろうに。でもね、と私の中のもう一人の私が抗弁する。その本のひとつひとつは、そのつど切実な問いに導かれていたじゃないか。それはお前の学問的出会いの軌跡なのだ。いや、それは「中野」という個人の歩みとすら言えない。単著と響き合って生まれている共著、共編著まで含めて考えると、それらは、お前が身を寄せていた空間に生じた諸現象の連鎖と言うしかない。お前はそんな空間にいられたことをもっと感謝しなければいけない。それはそこに共にいた人々のおかげなのだから、と。

確かにそうだ。大学の退職ということでこうやって改めてリストを作ってみると、大した「業績」というほどのこともないが、それなりに歴史はあって、そのつどに出会った人々の顔が浮かぶ。今は、そのすべての人々に感謝したいと思う。

もっとも、離れ離れに置かれているそんな本たちにも、もちろんそれらをつなぐ糸がないわけではない。そこに「中野」も生きている。最初の著作である『マックス・ウェーバーと現代』でヴェーバーに即してまず仔細に考察したのは、学問方法としての「解明的理解」についてだった。歴史や社会を考える時に、あくまでそこに生きる行為者に焦点を当て、その行為の「内面」からの理解

を通じて、当の行為の歴史的意義を問う。ヴェーバー理解社会学から学んだこのような学問方法は、歴史的事実を確定しその因果連関を検証することを主務とする歴史学の実証主義とは異なって、行為者のエージェンシーとコミットメントに理解的に寄り添い、その行為の意味や責任を問うことにも可能性を開いている。そして確かに、起点にあったこの方法論上の意識がその後の私を導いて、『大塚久雄と丸山眞男』で大塚や丸山に即して思想史を語り、『詩歌と戦争』で白秋に連関させつつ民衆精神史を語る歩みを支えてきた。

また、学問研究のテーマとしては、最初の著作『マックス・ウェーバーと現代』は、〈物象化としての合理化〉という視点から〈近代〉という時代への批判の道を開いている。そしてこれは、次作『近代法システムと批判』での法システム論にまっすぐに続いた。もっとも私自身としては、90年代になって脱冷戦へと時代が進み、この背景の下で理論的な近代批判が歴史的な総力戦体制論に展開して、さらには継続する植民地主義とボランティア動員への批判的な考察にその内容を実質化していったことが、とりわけ心に残っている。そこでは実に多くの人々との出会いがあった。そうして『継続する植民地主義』、『沖縄の占領と日本の復興』、『歴史と責任』という、共編著三部作が生まれている。

このように見てくると、離れ離れの本たちにも、それらを結びつけている幾筋かの糸はある。その存在がいかにも希薄に感じられるのは、それがまだ確かなネットワークとしてしっかりした思想表現を与えられていないということだろう。幸いなのか、退職はそんな反省の機会にもなったが、それとほぼ同時に、マックス・ヴェーバー生誕 150周年を記念する共編著の論文集(『マックス・ヴェーバー研究の現在』)も刊行される。ヴェーバー研究は私の研究生生活の起点だから、これは「ふりだしに戻る」ということなのかもしれない。そうであるなら、ここからまた新たな気持ちで出発することにしようか。